

読書という「光」を見つけるために

町田 恵弥

はじめに

近年、若者の読書離れが叫ばれている。実際、29年度全国学力学習状況調査の読書時間に関する質問項目の結果では、小学6年生の63%、中学3年生の70%が1日30分以下と回答していた。しかし、次期小学校学習指導要領の「学びに向かう力、人間性等」における全学年の目標において、「読書をし、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う」という文言があることからもうかがえるように、読書は大切なことである。私自身、読書は人生を豊かにするうえで欠かせないものだと考える。

そこで、『1. 読書ライフによって私が見つけた「光』』と『2. 読書という「光」であふれた学校を目指して』という二つの面から考えを述べたい。

1. 読書ライフによって私が見つけた「光」

(1) 小学生の私にとって、読書とは「友達との出会い」だった

私が本に対して特別な感情を抱いたのは小学1年生の時に読書感想文を書くために『むしたちのうんどうかい』（著者：得田之久）を読んだ時だったように思う。この話は、応援合戦はコオロギ、玉入れはダンゴムシなど、虫たちがそれぞれの特徴を生かしながら運動会に取り組むというものだった。私ははじめ、「そうなんだ」「面白いな」という感想しか抱かなかった。しかし、それでは読書感想文を書くことはできない。読書感想文を書くために、同じ本を何度も何度も読み返した。小学1年生の私にとって、意図的に何度も本を読み返すという経験は間違えなくこの時が初めてだった。すると、少しずつ登場人物である虫たちに対して感情を抱くようになってきたのだ。私の読書感想文には、「玉入れで玉にされているダンゴムシは痛くないのかな？」という1文があった。小学生の私は、ダンゴムシを1人の友達のように思ったうえで、ダンゴムシの気持ちを考えたのである。

それ以降、私は新たな友達に出会い、出会った友達の様子を知るため、本をたくさん読むようになった。そのため、小学生時代に読んでいた本のほとんどがシリーズ物である。低学年では、『かいけつゾロリ』（著者：原ゆたか）シリーズを毎日のように読んだ。ゾロリの破天荒ぶりが大好きで、「次はどんなことをする？」というわくわくした気持ちを、ゾロリと一緒に味わっていた。中学年では、『黒魔女さんが通る』（著者：石崎洋司）や『若おかみは小学生!』（著者：令丈ヒロ子）等の恋愛要素が入っているシリーズ物を多く読んだ。まるで友達の恋愛相談を受けているような気持ちになり、一緒にドキドキしながら読んでいた。高学年では、『名探偵 夢水清志郎』（著者：はやみねかおる）、『怪人二十面相（少年探偵）』（著者：江戸川乱歩）等ミステリー小説に興味を持ち読み進めた。ハラハラしながらも、主人公の女の子や少年探偵団などの友達たちが危険な目に合わないようにと、自分なりに一生懸命謎を解きながら読んでいた。このように小学生の私は、読書を通して友達というたくさんの「光」に会うことができたのだ。

(2) 中学・高校生の私にとって読書とは、「もう1つの世界の体験」だった

電車通学だった私は、駅のホームや電車の中で本をよく読んでいたのだが、本の世界に入り込みすぎて、ホームにいるにも関わらず電車に乗り過ぎたり、降りるはずの駅で降り忘れてしまったりすることが度々あった。また、本屋では、自分がどういった世界を体験したいかを考えながら本を選んでいった。ジャンルは、『ダレン・シャン』（著者：ダレン・シャン）等のファンタジーから、『TUGUMI』（著者：よしもとばなな）等小説まで幅広く読んでいた。その中でも強く印象に残っている本の1つが『レインツリーの国』（著者：有川浩）である。この本は、耳の不自由な女の子がそれを隠しながら生きているのだが、親しい男子の言葉で自分に自信を持って生きようと変化していく話である。私にとって、この小説の世界を体験できたことは、とても大きな経験になった。私はもともとネガティブな性格なのだが、この本に出会ったことで、自分で自分を認め、前を向いて生きていこうと決意した人の輝きは何にも代えられないほど素晴らしいものなのだと思うことができた。現在もこの本は私のベストブックである。

もう1つ、私の中学・高校時代の読書を振り返る上で欠かせない本たちがある。ケータイ小説だ。流行していたこともあり、『恋空』（美嘉）、『赤い糸』（メイ）等少なくとも30冊以上は読んでいた。ケータイ小説は、私たちと変わらないような中高生や、普段は書き物とは無関係な人が書いていることが多い。そのため、本来の世界に限りなく近い「もう1つの世界」を感じることもできた。『恋空』は、薬物や痴など、決して身近とは言えないような内容だが、自分と変わらないような年齢の主人公の様子が背伸びをせずに書かれていることで、自然と感情移入をしていた。また、「もう1つの世界」を作り出せることに憧れを感じ、ネット上ではあるが、私自身ケータイ小説を書いたこともある。初めて発信する側も体験したことで、その世界を作り出す難しさを感じ、余計「もう1つの世界」に入り込める素晴らしさを実感することとなった。このように「もう1つの世界の体験」をしたことは、その世界の素晴らしさだけではなく、現実の世界にあふれている何気ない「光」を見つめ直すきっかけにもなったように思う。

(3) 大学生の私にとって、読書は「日常のスパイス」になっている

本を読むことで、ワクワクする。悲しくなる。キュンとする。ハラハラする。ドキドキする。そして、さらに色々な感情を味わいたいと思い、また本を手にかけている。読書は私の人生に彩を与えてくれた。また、今までとは読書の仕方が変化した部分がある。好きな作家の本を中心に読むようになったことだ。読書が日常の一部となったことで、読んでみて自分に合わなかったり、最後がすっきりとしない終わり方であったりすると、とてもモヤモヤしてしまう。しかし、全面的に信頼できる作家の本を読むことで、構えることなく、読んだものをそのまま私の日常の一部にすることができる。今好きな作家は、有川浩である。有川浩の本だけで、20冊は読んでいたのだが、その中でも最も好きなのが、中学・高校の時に読んだ『レインツリーの国』、強く印象に残っているのは『キケン』である。『キケン』は、機械制御研究部の男子大学生が全力でふざける物語だ。何事にも全力な姿勢や、本当に楽しそうに大学生活を送る彼らをとて羨ましいと思った反面、絶対に自分だったら出来ないようなことをしている彼らに、少し苦笑いで読んでいたところもあった。とにかく内容も描写も派手な『キケン』はとても印象に残っている。まさに、私の「日常のスパイス」となった1冊であった。このようにスパイスを求めて、あまり時間に余裕がないような時

でも、ついつい本を手にしてしまうことも多い。

以上のように、読書は私の人生に様々な角度から「光」を当ててくれたように思う。しかし、この「光」というのは、人によって見つけ方も関わり方も異なるものである。では、読書の素晴らしさを伝えていくためには、どうすればいいのだろうか。以下に、教師になった際に行いたい読書推進の3つの方策を提案する。

2. 読書という「光」であふれた学校を目指して

(1) 帰りの会やHRで行う1分間スピーチ

私は、友人に本を紹介するのがとても好きだ。その本の魅力や、自分がどのように感じたのかを伝えることは、宝物を紹介するような高揚感がある。「私にとっての読書」とは、「友達との出会いの場」、「もう1つの世界」、「日常のスパイス」であったと述べたが、このように自分だけが感じた「光」を紹介するというのは、とても楽しいものである。また、そのため、友人に紹介された本は、読んでみたいという気持ちが高まる。実際、先日も友人に本を紹介され、2冊読み終えた。普段は読まないような本であったが、それがまた面白かった。

このように、伝え、伝えられる楽しさを味わえるよう、帰りの会やHRにおいて日直の1分間スピーチを設定したい。その際はただ発表をさせるのではなく、発達段階に合わせて「私の大好きな　ちゃん・くん」や「初めて発見！」などのテーマを1か月ごとに与える。それによって、子どもが紹介したい本を具体的にイメージするとともに、意欲を持って取り組むことができるのではないかと考える。また、読書以外にもいくつかのテーマを作り、そこから1つ選べるようにする。それによって、本を読むことを義務化するのではなく、伝えることの楽しさを通して、読書の楽しさにも気づいていけるのではないかと考える。

(2) 定期的な本の紹介通信の発行

私は、本が苦手な人の気持ちを考えるために、現在普段読書を全くしない大学の友人に、今までにどのような本を読んだことがあるか聞いてみた。すると、中学・高校生の時にはバスケットボールについての本を読んでいたと教えてくれた。その友人は、バスケットボールが大好きで、大学でも暇な時間があればバスケットボールをしている。読書に対して苦手意識があっても、好きなものの情報を得るためであれば、関心を持って読めたそうだ。また、考えながら読む必要がなく、手軽に読むことができるという理由で、普段から漫画は多く読んでいるということだった。

このことから、読書に苦手意識を持っている人でも、本の内容や種類を広く考え、そのような本を薦めることで、本を読んでみようという気持ちが生まれるのではないかと感じた。そこで考えたのが、本の紹介通信である。事前にとったアンケートを活用したり、普段の様子を観察したりしながら、子どもたちのニーズに合った本を紹介していく。例えば、『絵を書くことが好きな人にオススメの本3選』等のタイトルで、教師やクラスの子どもの読んだ感想も記載した通信を発行する。そうすることで、選択の幅が広がると同時に、読み手が自分の興味のある分野の本を選ぶことができる。また、興味のなかった分野でも、ふと図書室等で紹介されていた本を見かけた際に、「あの本だ！」と本を手取るハードルを下げること

ができるのではないだろうか。このように本の紹介通信を通して、今まで好きだったことに対して感じていた「光」を読書の中にも見つけると同時に、今までは見ようとしなかった「光」も知るきっかけを作れたらと思う。

(3) 図書室を活用した授業の増進

本を読まない人は、まず図書室に行くことが少ないように感じる。大学でも、3年生になって初めて図書館を利用したという友人や、図書館にどのような本があるのか知らない友人がいた。私は数えきれないほど図書館や本屋を利用しているが、目当ての本を借りるため・買うためだけではなく、行って面白そうな本を探したり、目に入った本が気になって購入したりすることも少なくない。このように、とりあえず行ってみる、ということも読書をするきっかけとして大切なことだと考える。しかし、普段行かない場所に、しかも本があまり好きではない人に対して、自ら行くよう促すことは難しい。そこで、授業を活用し、図書室の敷居を低くすることを考えた。

例えば、生活科のうさぎの飼育方法を考える時間において、図書室を利用する。図書室で授業をすることで、うさぎに関する本を探しながらのグループ活動を行うこともできる。また、総合の時間を用いて「幼稚園児に本を紹介しよう」という授業を行う。それによって、本を読むきっかけを作ることはもちろん、実際に自分で様々な本を読み比べるために、何度も図書室を訪れることになる。このように、授業を通して図書室に親しめる機会を意図的に多く設定することで、図書室に足を運びやすくなるのではないだろうか。

おわりに

私は、読書が好きだ。楽しい本を読むことで元気になれる。辞書や図鑑を見ると、分からないこともすぐに調べられる。短編小説を読み、時間を潰すこともある。もちろん、漫画や絵本を読むことで、ドキドキしたり、時には泣いたりもする。このように、読書は私にたくさんの「光」を与えてくれた。私はこのような読書の素晴らしさを、積極的に子どもたちに伝えていきたい。しかし難しいのは、読書に対するかわり方が一人ひとり異なることだ。例え同じ本を読んだとしても、感じ方は千差万別である。だからこそ、自分の価値観を押し付けず、読書を薦める側が、幅広い視野を持つことがとても大切なのだと思う。どんな本から、どのようなタイミングで「光」を見付けられるかは分からない。しかし、誰であっても、読書によって何かかけがえのない、「光」を得ることができると思っています。子どもたちに読書のきっかけを与えられるように、様々なタイミングでたくさんの選択肢を用意したい。「読書ってなんか面白そうだな。」と、少しでもそのように子どもはもちろん大人も考えてくれたらと思う。そのために、上記に記したような方策を実践していくとともに、私自身が読書を全力で楽しみ続けられるような教師を目指したい。

・文部科学省，2017，小学校学習指導要領「国語」

・国立教育政策研究所，2017，平成 29 年度全国学力・学習状況調査報告書，

閲覧日：2017/09/17 <http://www.nier.go.jp/17chousakekkahoukoku/report/data/17qn.pdf>